

「茶碗の色～企画展Ⅰ こぼれ話～」

今年度の企画展Ⅰのテーマは「色」。普段は「形」や「時代」で選り分けるところを資料の「色」にこだわり、色ごとに分けた展示を行っています。

企画展Ⅰのチラシでは、色は「人間社会や文化の形成において重要な役割を担ってきた」と説明しています。最初は大げさに感じたこの表現も、色に着目して資料を選定していくうちに腑に落ちました。特にそう感じたのが、とある茶碗の色についてです。

今回の展示で陶磁器類は、赤茶色の土器から灰色の須恵器、緑、黄色の陶器から白と青の磁器へ、といった具合に他の地域との交流や技術の発展によって色が変化し、種類も増えた資料、と紹介しています。

そうして時代を追うごとにカラフルになっていく陶磁器類とは逆に、16世紀末に黒・赤一色のシンプルな器が制作されました。楽茶碗です。

楽茶碗は佗茶（わびちゃ）を大成した千利休の指示のもと、長次郎という人物によって創造された佗茶のための器です。

粉末の茶にお湯を入れ、攪拌（かくはん）して飲む喫茶法「茶の湯」は、中国から12世紀代に日本に伝わり、寺院や武家、公家などの上流階級の間で広まりました。室町時代には、権力者たちは唐物（からもの）といわれる美しい舶来品を用いて、茶を喫することで権威を示すようになりました。

そのような風潮の中、利休は自ら理想とする茶の湯、佗茶に合った器を探し、ついには創り出しました。

無彩色である黒は、器としての存在を捨て去り、茶を引き立たせるために選ばれた色で、赤は土そのものの色で加色されておらず自然物に近い色彩でした。

色の選択は、これまでは慣習もしくは権力者の意向が大きく反映されたものでした。対して楽茶碗は、利休の美意識を色彩に反映させたもの、つまり個人の意向を色で表したものとなります。

時の権力者、豊臣秀吉は黒茶碗が嫌いだったと伝えられています。権力者の意向より自らの美意識に適う「佗び」を表現した茶碗の色は、まさしく人間社会や文化の形成において重要な役割を担ってきた、といえるのではないのでしょうか。

（谷口晴子）

参考文献：松原龍一 2016「茶碗の中の宇宙 楽家一子相伝の芸術」 図録『茶碗の中の宇宙 楽家一子相伝の芸術』 京都国立近代美術館・東京国立近代美術館・楽美術館・講談社・NHKプロモーション
東京国立博物館 2017『特別展 茶の湯』NHK・NHKプロモーション・毎日新聞社
浜本隆志・伊藤誠宏 2005『色彩の魔力』明石書店